

言語学習における Learning Style と Learning Strategy

竹田 明彦

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

言語学習の研究は学習成果だけに焦点を当てるのではなく、学習者が学習する過程に目を向けるようになってきた。認知領域や情意領域の要因によって学習者がほぼ無意識的にとる learning style の主な構成要素が次第に明らかにされてきている。

ある学習課題に対して学習者が意識的に取り組む活動を learning strategy と言い、その研究も盛んに行われている。本稿では、先行研究を調べ learning style と learning strategy の関係を明らかにして、learning style の主な構成要素を掴み、learning strategy 研究の動向をまとめてみたい。

Learning Style と Learning Strategy の関係

言語教育の分野でも早くから学習者要因と言語能力(language proficiency)の関係について研究が行われてきた。例えば言語能力と言語適性、学習者の性格、学習意欲との関係をみる研究がたくさん行われてきた。ところが学習者要因はいろいろな要因が複雑に絡み、また言語環境もそれぞれに異なり、学習者はその環境に対してさまざまな学習行動をするのであるから、多くの場合明解な答えが導き出せなかった。そこで学習行動を learning style と learning strategy に分けて考えるようになった。

Learning style は認知的特性、情意的特性、生理的な特性として捉えられ学習環境に対してどのように学習者が感じるかそして反応するかを比較的安定したかたちで示す指標である。Brown(1994)は learning style を次のように説明している。

*Style is a term that refers to consistent and rather enduring tendencies or preferences within an individual. Styles are those general characteristics of intellectual functioning (and personality type, as well) that especially pertain to you as an individual, that differentiate you from someone else. For example, you might be more visually oriented, more tolerant of ambiguity, or more reflective than someone else — these would be styles that characterize a general pattern in your thinking or feeling.*¹⁾

Learning strategy という語は Rubin(1975)が good language learner の研究論文で使ったのが最初であろうと思われる。Rubin は language strategy を「知識を習得するのに使う技術や工夫」(the techniques or devices which a learner may use to acquire knowledge)の意味で用いている。同じ意味で 'learning behaviour' や 'cognitive process' が用いられるが、'learning strategy' が最もよく使われ、この言葉にほぼ統一されるようになった。²⁾ Learning strategy について Brown(1994)による次の説明はより具体的である。

Strategies are specific methods of approaching a problem or task, models of operation for achieving a particular end, planned designs for controlling and manipulating certain information. They are contextualized "battle plans" that might vary from moment to moment, or day to day, or year to year. Strategies vary intra individually; each of us has a whole host of

possible ways to solve a particular problem and we choose one — or several of those in sequence — for a given problem.³⁾

Learning style と learning strategy の双方を比べると、どちらも学習者の重要な個人的特性であるが、前者は学習者の認知的要因や情意的要因によって学習に取り組む前にすでに形成されているもので、その学習者がどのような学習課題に対しても行動を起こすパターンあるいは学習傾向と受けとめてよいだろう。学習者は一人ひとりの learning style を持つと同時にそれぞれの学習に対してより効果的に学習するための方法を意識的に考え実践する。後者はそのような取り組みである。言語学習における learning style と learning strategy の関係は概ね Fig. 1 のように説明できよう。

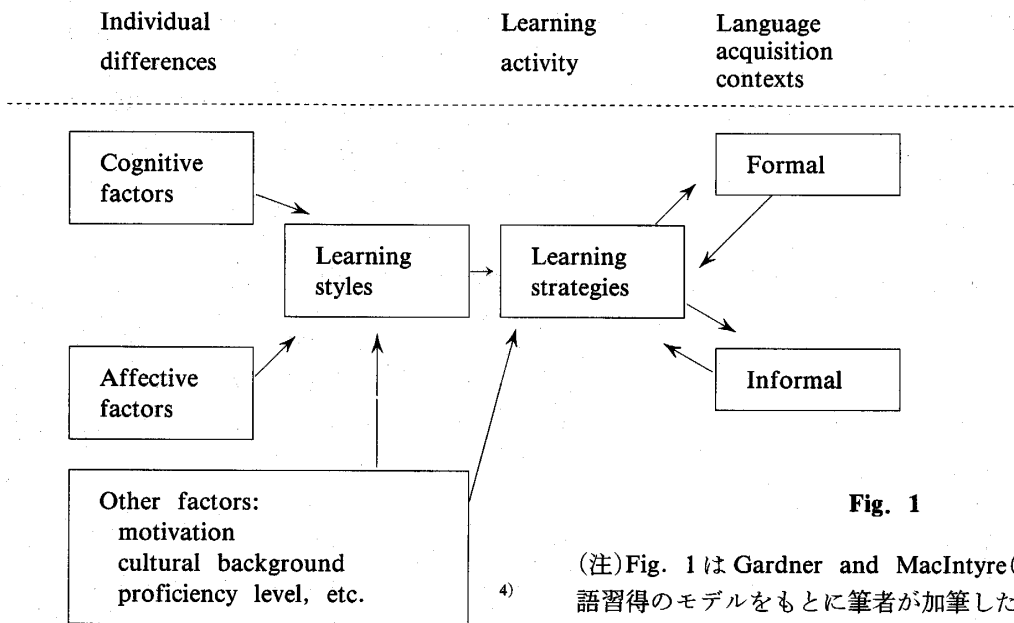


Fig. 1

(注) Fig. 1 は Gardner and MacIntyre (1992) の第二言語習得のモデルをもとに筆者が加筆した図である。

Learning Style を構成する主要要素と先行研究

学習に影響を及ぼす学習者要因は様々なものが考えられるが、Skehan (1989) の survey は Table 1 のようにまとめられる。Table 1 では複雑に絡む要因の中から、今までに行われた先行研究をもとに言語習得に大きな影響を及ぼすものが掲げられている。この中で learning style を形成するのは cognitive and affective factors である。さらに他の研究者の文献研究から学習者の learning style に影響を及ぼす要因だけを取り上げてみると Brown (1994) では、Table 2 のようになる。Oxford and Anderson (1995) によると、学習者の learning style を決定する要因は少なくとも 20 あるとしながらも、特に重要な要因は Table 3 のようにまとめられる。

Skehan (1989)

Table 1

- 1 Language aptitude
- 2 Motivation
- 3 Language learning strategies
- 4 Cognitive and affective factors
 - * a extroversion/introversion
 - b risk-taking
 - c intelligence
 - ** d field independence
 - e anxiety

Factors listed as influencing individual learners in language learning ⁵⁾

(注) ** の印は 3 つの表に現れた要因、* は 2 つの表に現れた要因を示す。

Brown(1994)	Table 2	Oxford and Anderson(1995)	Table 3
** Field independence Left-and right-brain functioning Ambiguity tolerance * Reflectivity and impulsivity * Visual and auditory styles		1 Global and analytic ** 2 Field independent and field dependent * 3 Impulsive and reflective 4 Intuitive-random and concrete-sequential 5 Closure-oriented and open * 6 Extroverted and introverted * 7 Visual, auditory and hands-on	
Learning styles receiving attention of L2 researchers ⁶⁾		Significant learning style dimensions for L2 or FL ⁷⁾	

3つの代表的な文献研究でいずれにも取り上げられている項目は場依存と場独立(field independence/field dependence)である。この要因がいかに学習スタイルに大きなウェイトを占めているかが分かる。2つの文献研究が取り上げている項目は、外向性と内向性(extroversion/introversion)、熟慮性と衝動性(reflectivity/impulsivity)、視覚型と聴覚型(visual/auditory)である。数ある学習者要因の中でこれらの要因が特に learning style の形成に重要であると考えられる。

場独立型の学習者は、視・聴覚刺激場面に対して能動的に働きかけ、刺激場面の状況を自らの判断基準で捉えようとする。場依存型の学習者は、視覚刺激あるいは聴覚刺激場面におかれると、全体的なその刺激に作用され、自らの状況判断ができず不安の耐性も低い。従って心理的な安定を外部に求めるから親和傾向が強くコミュニケーションを大事にする。このような心理特性は学習にも大きく作用すると考えられ、言語教育の研究分野となってきた。

この心理特性と言語習得の関係を調べた研究では、Tucker, Hamayan, and Genesee(1976)の調査がある。英語を話しているカナダの high school の生徒がフランス語を学んでいる状況で、field independence は French achievement test で良い成績をおさめることを予測する指標であったと報告している。⁸⁾ Naiman, Fröhlich, Stern, and Todesco(1978)では、field independence と imitation test においてプラスの相関があった。また Abraham(1982)は成人の ESL 学習者を対象に調査にして、field independence が作文や適語記入の文法テストにおいてよい成績を収める指標となると述べている。⁹⁾Chapelle(1988)の研究でも field independence と TOEFL score にプラスの相関があった。¹⁰⁾

ところが、field independence/field dependence と言語習得の関係を調べた研究で必ずしも一致した結果が得られたわけではなかった。Bialystok and Fröhlich(1978)の研究では、カナダの学校でフランス語を学ぶ生徒を調査した結果、外国語の reading, listening, writing の能力と field independence/field dependence には有意差が見られなかった。¹¹⁾Tucker, Hamayan, and Genesee(1976)の研究でも field independence/field dependence と外国語全体の能力とは有意な差が示されたものの、reading, listening, speaking の領域では有意差が見られなかった。¹²⁾このような研究事例を取り上げ、Ellis(1985)は field independence/field dependence は第二言語習得の重要な要因には思えないとまで述べている。¹³⁾調査結果が研究によって一致していなかったのは、場依存の学習者は人間関係を重んじ、全体的な視野にたった見方をする気質を備えているから第二言語の運用面で場独立型の学習者よりもうまく学習しているためかもしれない。¹⁴⁾

外向性の人は活気に溢れ幅の広い興味関心を示し友達も多い。英会話やロールプレーを楽しみ周りの人から注目されるパーソナリティである。内向的な人は自分一人で勉強するか、あるいはよく知っている人と勉強することを好み言語の学習においてもグループワークは好まない。興味関心の度合は外向性の人よりも強い。言語を教える教師は言語活動に自由に参加する話し好きで外向的な生徒を誉める。特に活動が重んじられる言語学習の授業では活動的な生徒が好意をもって見られる。外向性と内向性のステレオタイプをこのように考えると、言語学習には内向性の人よりも外向性の人の方が適しており、語学力も勝るであろうと考えられる。このような仮説のもとに研究が進められたが、仮説とは反対の調査結果となる場合が多かった。Busch(1982)は日本で英語を学んでいる成人の学習者を対象にして、外向性・内向性と英語

能力の関係を調べた。ところが仮説を裏付ける結果はみられなかった。発音でも内向性の学習者の方が外向性の学習者よりも勝っていた。¹⁵⁾ Carrell, Prince, and Astika(1996)は、インドネシアのEFLの学習者を対象にして外向性/内向性と言語能力の関係を調べた。この研究では、昔からの言語能力テストで調べた限り、内向性の学習者の方が学習の成績が良かったという結論を報告している。¹⁶⁾ 言語能力のどの側面をいかに測るかによって異なるかもしれないが、先行研究から判断する限り、内向性の学習者の方が結果的には language test で高い得点を収める傾向がある。

熟慮性の強い学習者はゆっくりではあるが正確な学習をするのに対して、衝動的なタイプの学習者は学習は速いが正確性に欠ける。一般的に言語学習では衝動性のある学習者は早まった不正確な反応をするから問題があり、熟慮性の強い学習者は効果的に学習すると考えられている。Parry(1984)は衝動性よりも熟慮性の方が外国語能力の向上に影響していることを発見した。しかし Ehrman and Oxford(1988)は、完全癖が強くなり過ぎると、それが不安につながり、運用能力が落ちることを資料により裏付けている。また Meredith(1976)や Messer(1976)の研究では、効果的に学習をさせるには衝動性の傾向が強い学習者には自分の反応を出す前に少し時間を置かせ、熟慮型の学習者には自分の答を系統立て明確にして口に出して、それを心の中でチェックさせることによって学習効果が上がったと報告している。¹⁷⁾

学習者には、どちらかと言えば reading を好み、表や図を見て勉強するのが好きな視覚型と講義やテープを聞いたりする方が学習しやすいという聴覚型がある。その他にゲームなどで体を動かしたり演劇をしたりして学ぶ方が性に合っている運動型の learning style を好む学習者もある。この learning style に注目して Reid(1987)は第二言語として英語を学ぶ成人の学習者を対象に調査をしている。その結果、朝鮮人学習者は英語を話すアメリカ人よりも視覚型であり、日本人生徒も中国人やアラビア人よりも聴覚による学習を好まないことが分かった。この研究によって学習者が視覚型か聴覚型かは文化的な背景が大きく影響していることが明らかになった。Reid は learning style はアメリカでの滞在期間、性差、教育レベルなどによっても変化すると述べている。また多くの学習者が運動型の学習を好み、その傾向は特に中国人、アラビア人、スペイン人、朝鮮人、タイ人に強く現れた。¹⁸⁾ Rossi-Le(1995)の研究では、年齢が上になると学習者はより視覚型の学習を好み、書き言葉にふればふれるほど、視覚による学習を好む結果を得た。¹⁹⁾ 日本人の学習者を調査した Hyland(1994)の研究では、日本人は特定の learning style を好んで使うということはないという興味ある結果を発表している。²⁰⁾

心理的テストの一つである MBTI(Myers-Briggs Type Indicator)を用いて language learning style を測定した研究がある。MBTI は、Extroversion-Introversion(外向, 内向), Sensing-Intuition(感覚, 直観), Thinking-Feeling(思考, 感情), Judging-Perceiving(判断, 知覚)の4つのスケールから構成されている。外向性, 内向性は personality 特性として研究されてきたものである。感覚, 直観とは、学習者が五官を通して具体的で、実際の事実に基づき物事を受け止めようとするのか、或いは全体をひっくるめて直観で受け止めようとするのかの尺度である。思考, 感情とは物事の判断や意志決定をする場合、事柄を分析し、順序だてて結論を出すのか、または主観的に自分にとって重要であるか否かの価値判断で結論を出すのかの尺度である。判断, 知覚は、学習者がどのように生きようとするか、即ち、物事に規定を作り、計画的に秩序を守って生きようとしているのか、柔軟に自然に任せて物事に適応して生きようとするのかの尺度である。MBTI は前述の learning style をすべて測定するものではないが、衝動性・熟慮性や場依存・場独立の基準も感覚, 直観や思考, 感情のなかに重なり合っていると考えられる。学習者の learning style を把握する一つの有効な心理テストであろう。

Moody(1988)は MBTI を用いて第二言語を専攻している学生と一般学生を比較した。①第二言語を専攻している学生は一般学生に比べて直観にたよって物事を知覚するタイプ(intuitive type)が多く、体験を踏まえて、実際の事実に基づき物事を知覚するタイプ(sensing type)が少ないこと、②事柄を論理的に分析して意志決定をするタイプ(thinking type)の方が、好きや嫌いなど自分の気持ちで意志決定をするタイプ(feeling type)よりも多かったことを報告している。²¹⁾ Ehrman(1990)は MBTI で learning style を測定し、SILL(Strategy Inventory for Language Learning)で learning strategy を調査した研究で、①帰納的な推理力を必要とするプログラムや自学自習をするプログラムでは、内向性で直観力を働かして学

ぶスタイルの学習者がうまく学習する, ② 五官を働かして学習する人は, 綿密に構成され主にドリルにたより小さな目標を設定しているプログラムを好む, そして, ③ MBTI によって学習成果を予測できると述べている.²²⁾

Learning Strategy の研究

言語学習者を幅広く対象にして行われた strategy 研究としては, O'Malley, Chamot, Stewner-Manzanares, Kupper, and Russo(1985)²³⁾や O'Malley, Chamot, Stewner-Manzanares, Russo, and Kupper(1985)²⁴⁾などがある. 一連の研究によって, ① metacognitive strategy よりも cognitive strategy の方がよく使われる, ② もっとも一般的な metacognitive strategy は「自分の学習を計画する」ことで, 「自己モニターする」や「自己評価をする」はあまり用いられない, ③ social strategy や affective strategy はあまり用いられないことが明らかにされた.²⁵⁾ 調査対象は何等かの形で言語学習の場に拘束されている学習者であるから, cognitive strategy がたくさん現れるのは当然の結果と考えられる.

文化的な背景によっても学習者の learning strategy は異なっている. Skehan(1989)は, 大学院に入るために英語を勉強しているヒスパニックとアジアの学生を対象にした Politzer and McGroarty(1985)の研究²⁶⁾を取り上げている. この研究で学習者の文化的な背景によって learning strategy が異なることを指摘し, そのことを踏まえてこそ learning strategy の解釈ができると述べている.²⁷⁾

Rubin(1975)が示している good language learner の特徴²⁸⁾を Oxford(1990)の learning strategy の分類²⁹⁾に対応させると概ね Table 4 のようになる.

Rubin による Good Language Learner の特徴	Oxford の Strategy	Table 4
To be a willing and accurate guesser	Compensation Strategy (Guessing intelligently)	
To focus on form by looking for patterns	Cognitive Strategy (Creating structure for input and output)	
To have a strong persevering drive to communicate	Metacognitive Strategy (Seeking practice opportunities)	
To takes advantage of all practice opportunities	(Evaluating your learning: Self monitoring)	
To monitor his or her own speech and that of others		
To pay attention to meaning		
To be willing to make mistakes in order to learn		

Good language learner は Table 4 のように metacognitive strategy, cognitive strategy, compensation strategy を用いている. Memory strategy, affective strategy, social strategy が現れないのは, good language learner の場合, あまり苦勞することなく記憶することができ, 不安もなく最初から意欲があって, 自分の情意面を気にする必要がないと解釈できる. また他人のことを気にかけず自己本意に学ぶ learning style を備えていると考えられる.

Rubin の研究で現れた good language learner は metacognitive strategy を多く使っていることが特徴の一つとしてあげられる. O'Malley et al. (1985)が, 初心者に比べて中級レベルの学習者の方が metacognitive strategy を多く使う傾向があったという報告と一致する. 2つの研究報告から, 言語能力がつかほど学習者は metacognitive strategy を用いるようになるのであろうと推測できる.³⁰⁾

Good language learner の研究を土台として, learning strategy と proficiency の関係がさらに調査された. Bialystok(1981)が第二言語としてフランス語を学習する場で行った調査では, ① formal practice, informal(functional)practice, monitoring の strategy が言語習得の重要な役割を果たしている, ② 言語を実際の場で使おうとする functional strategy と言語能力の関係がもっとも大きい, ③ 能力の低い学習者には formal practice が有益である, ④ monitoring は言語能力にプラスの影響を及ぼしていることを

明らかにした。³¹⁾

Monitoring に注目して, Abraham(1983)は認知スタイルと monitoring との関係を調べた. その結果① field independence と書き言葉の学習における monitoring の量にはプラスの有意な相関があった, ② reflection(熟慮性)と誤文訂正問題をするときの monitoring 量にわずかにプラスの相関があった.³²⁾

Jamieson and Chapelle(1987)も field independence と学習者が production するときのモニター (monitoring output)には有意なプラスの相関があったと述べている. この2つの研究からも field independence と monitoring には何等かの関係があるようにみえる. さらに Jamieson and Chapelle の研究では TOEFL の得点との関係を調べ, リスニングで情報を受け入れるとき, 受け取るものを monitor する (monitoring input)回数が多い学習者はリスニングの得点がよくなかったと述べている.³³⁾

Strategy と学習者の心理面を調べた研究も多い. Oxford and Nyikos(1989)では, どのような strategy を用いるかということと自分の能力をどのように感じているかには強い相関があることが指摘された.³⁴⁾ また自分自身や自分の学習プロセスについてどの程度学習者が認識しているかが strategy に影響しているという考え方があつた. Tyacke and Mendelsohn(1986)は日記の分析から学習者は学習が進むにつれて strategy に気づくようになると報告している.³⁵⁾

Attitudes との関連を調べた研究では, Bialystok(1981)が, 学習者の attitudes が learning strategy の選択に大きな影響を及ぼすことを発見した.³⁶⁾ Wenden(1987)は, 学習者の自己を見つめる消極的な態度を変えなければ, どのような strategy の指導も長い効果は望めないと主張している.³⁷⁾

Motivation と learning strategy の関係をみた研究では, Oxford and Nyikos(1989)が, 意欲をもった学習者は意欲の少ない学習者よりも, 「決まった言い回しや文型を覚えて使うストラテジー」(formal rule-related practice strategy), 「実践の機会を求めるとするストラテジー」(functional practice strategy), 「一般的な学習ストラテジー」(general study strategy), 「情報内容を調節したり捉えたりするストラテジー」(conversational input elicitation strategy)をよく用いたと報告している.³⁸⁾ Bacon and Finneman(1990)も意欲があるかどうかを実際に learning strategy を用いるかどうかを予測する因子になると述べている.³⁹⁾ McGroarty(1987)は, スペイン語を伝達重視の方法で, しかも自然に練習の機会を与えられる状況を与えて教えた大学生を対象に strategy の調査をした. 学生は communication-oriented strategy を奨められてもそのような strategy を用いなかった. 恐らく motivation が低いためであろう.⁴⁰⁾ Oxford and Nyikos (1989)の研究でも「実践の機会を求めるとするストラテジー」(functional practice strategy)は他の strategy に比べて使われる頻度が少なかった. この背景には学習者が履修条件を充すとか, よい成績を取りたいなどの学習動機をもって言語を学んでいる実態があると考えられる.⁴¹⁾ Ehrman and Oxford(1988, 1989)と Oxford(1986)の研究では, 工作上必要であろうから外国語を学んでいるという道具的動機 (instrumental motivation)をもった学習者の場合には functional practice strategy が頻繁に用いられていた.⁴²⁾ これらの研究結果から, motivation と strategy の関係をみる場合, instrumental motivation の中でも更に何の目的で目標言語を学ぼうとしているか, そしてそれが strategy とどのように関わっているかを見極めていく必要がある. Oxford and Nyikos(1989)は, motivation が learning strategy に影響を与え, その結果 proficiency が高まり, その proficiency によって motivation がさらに高まると考えている.⁴³⁾

今後の課題

Learning strategy は学習者の意識行動であるから, 意欲がなければ, 学習者の中に learning strategy は出てこないし, strategy training も効を奏しない. したがって learning strategy の研究では今後 motivation の問題が重要なテーマになってくると思われる.

日本の英語教育でも MBTI を用いて learning style を調べたり, SILL によって learning strategy を調査する研究が行われ始めた. 英語を学ぶ言語環境として恵まれていない状況の中で学習成果をあげるためには, どのような learning strategy が望ましいのであろうか. 一人ひとりの学習者の learning strategy を考える基礎資料となる調査研究が待たれる.

註

- 1) Brown, H.D., *Principles of Language Learning and Teaching*, Englewood Cliffs, N.J., Prentice Hall, p.104(1994)
- 2) Larsen-Freeman, D. and Long, M.H., *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, London, Longman, p.199(1991)
- 3) 前掲 1)Brown p.104
- 4) Gardner, R.C. and MacIntyre, P.D., 'A Student's Contributions to Second Language Learning. Part I: Cognitive Variables,' *Language Teaching*, 25, p.212(1992)
- 5) Skehan P., *Individual Differences in Second-Language Learning*, London, Edward Arnold, (1989)
Ellis, R., *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford, Oxford University Press, p.472(1994)の表を引用した。
- 6) 前掲 1)Brown pp.105-113
- 7) Oxford, R.L. and Anderson, N.J., 'A Crosscultural View of Learning Styles,' *Language Teaching*, 28, p.204(1995)
- 8) Tucker, G.R., Hamayan, E. and Genesee, F., 'Affective, Cognitive, and Social Factors in Second-Language Acquisition,' *CMLR*, 23, pp.214-226(1976)
- 9) Naiman, et al.(1978), Abraham(1982)は *MLJ*, 76, p. 492 を参照した。
- 10) Chapelle, C., 'Field Independence: A Source of Language Test Bias?,' *Language Testing*, 5, pp.62-68(1989)
- 11) Bialystok, E. and Fröhlich, M., 'Variables of Classroom Achievement in Second Language Learning,' *MLJ*, 62, pp.327-366(1978)
- 12) 前掲 8)Tucker et al.
- 13) Ellis, R., *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford, Oxford University Press, pp.115-116(1985)
- 14) Oxford R.L., 'Styles, Strategies, and Aptitude: Connections for Language Learning,' In Parry, T.S. and Stansfield, C.W.(Eds.), *Language Aptitude Reconsidered*, Englewood Cliffs, N.J., Prentice-Hall, p.78(1990)
- 15) Busch, D., 'Introversion-Extroversion and the EFL Proficiency of Japanese Students, *LL*, 32, pp.109-132(1982)
- 16) Carrell, P.L., Prince, M.S. and Astika, G.G., 'Personality Types and Language Learning in an EFL Context,' *LL*, 46, pp.75-99(1996)
- 17) Parry(1984), Ehrman and Oxford(1988), Meredith(1976), Messer(1976)は, 前掲 14)Parry and Stansfield pp. 84-85 を参照した。
- 18) Reid, J., 'The Learning Style Preferences of ESL Students,' *TESOL Quarterly*, 21, pp.87-111(1987)
- 19) Rossi-Le, L., 'Learning Style and Strategies in Adult Immigrant ESL Students,' In J. Reid (Ed.), *Learning styles in the ESL/EFL classroom*, Boston, Heinle & Heinle, pp.118-125(1995)
前掲 7)Oxford and Anderson p.209 を参照した。
- 20) Hyland, K., 'The Learning Style of Japanese Students,' *JALT Journal*, 16, pp.55-74(1994)
- 21) Moody, R., 'Personality Preferences and Foreign Language Learning,' *MLJ*, 72, pp.389-401(1988)
- 22) Ehrman, M., 'The Role of Personality Type in Adult Language Learning: An Ongoing In-

- vestigation,' 前掲 14)Parry and Stansfield, p.170を参照した.
- 23) O'Malley, J.M., Chamot, A.U., Stewner-Manzanares, G., Kupper, L., and Russo, R., 'Learning Strategies used by Beginning and Intermediate ESL Students,' *LL*, 35, pp.21-46(1985)
- 24) O'Malley, J.M., Chamot, A.U., Stewner-Manzanares G., Russo, R., and Kupper, L., 'Learning Strategy Applications with Students of English as a Second Language,' *TESOL Quarterly*, 19, pp. 557-584(1985)
- 25) 前掲 14)Parry and Stansfield, p.93
- 26) Politzer R.L. and McGroarty M., 'An Exploratory Study of Learning Behaviours and Their Relationship to Gains in Linguistic and Communicative Competence,' *TESOL Quarterly*, 19, pp.103-123(1985)
- 27) Skehan P., *Individual Differences in Second-Language Learning*, London, Edward Arnold, p.85(1989)
- 28) Rubin, J., 'What the "Good Language Learner" Can Tell Us,' *TESOL Quarterly*, 9, pp.41-45 前掲 14)Parry and Stansfield, p.92を参照した.
- 29) Oxford R.L., *Language Learning Strategies*, New York, Newbury House, (1990)
- 30) 前掲 24)O'Malley, et al.
- 31) Bialystok, E., 'The Role of Conscious Strategies in Second Language Proficiency,' *MLJ*, 65, pp.24-35(1981)
- 32) Abraham, R.G., 'Relationship between Use of the Strategy of Monitoring and the Cognitive Style,' *SSLA*, 6, pp.17-31(1983)
- 33) Jamieson, J. and Chapelle, C., 'Working Styles on Computers as Evidence of Second Language Learning Strategies,' *LL*, 37, pp.523-544(1987)
- 34) Oxford, R. and Nyikos, M., 'Variables Affecting Choice of Language Learning Strategies by Univeristy Students,' *MLJ*, 73, pp.291-300(1989)
- 35) Tyacke, M. and Mendelsohn, D., 'Students Needs: Cognitive as well as Communicative,' *TESL Canada Journal*, Special Issue 1, pp.171-183(1986)
前掲 14)Parry and Stansfield, p.96を参照した.
- 36) 前掲 31)Bialystok
- 37) Wenden, A., 'Conceptual Background and Utility,' In Wenden, A. and Rubin, J. (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall(1987)
前掲 14)Parry and Stansfield, p.98を参照した.
- 38) 前掲 34)Oxford and Nyikos
- 39) Bacon, S.M., and Finnemann, M.D., 'A Study of the Attitudes, Motives, and Strategies of Univeristy Foreign Language Students and their Disposition to Authentic Oral and Written Input,' *MLJ*, 74, pp.459-473(1990)
- 40) McGroarty(1987)は, 前掲 14)Parry and Stansfield, pp.98-99を参照した.
- 41) 前掲 34)Oxford and Nyikos
- 42) Ehrman and Oxford(1988, 1989)と Oxford(1986)は, 前掲 14)Parry and Stansfieldを参照した.
- 43) 前掲 34)Oxford and Nyikos